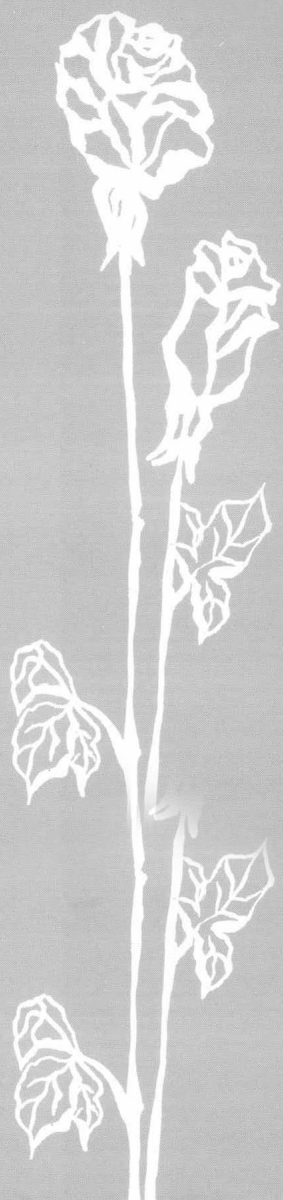


田村俊子作品集

第2卷

# 田村俊子作品集



## 田村俊子作品集・2

---

1988年9月10日 発行

定価 3500円

著 者 田村 俊子

発行者 武内 辰郎

発行所 (株)オリジン出版センター

東京都新宿区岩戸町16 メジャー神楽坂402

電話 (03) 260-0453

振替 東京 0-44705

装 幀 山本 亜矢

印 刷 (株) ケイエムエス

---

落丁本・乱丁本はお取り替えします

# 目

次——田村俊子作品集・2

|         |     |
|---------|-----|
| 時雨の朝    | 7   |
| 炮烙の刑    | 23  |
| 春の晩     | 85  |
| 枸杞の實の誘惑 | 111 |
| 母の出發    | 131 |
| 壓迫      | 165 |
| 夜着      | 219 |
| 彼女の生活   | 237 |
| 榮華      | 269 |
| 蛇       | 299 |

破壊する前……………329

山道……………361

湯浅芳子宛書簡……………379

解説……………黒澤亜里子……………427

解説……………長谷川 啓……………438



田村俊子作品集・2





## 時雨の朝

「何うしてそんな顔をしてゐるの。」

春枝は然う云ひながら、自分の膝の上のせてゐる道男みちおの手を取つてその顔をのぞいて見た。男が顔を上げた時、春枝はすこし自分の頬から臉まはたのまはりがちら／＼と縮んでゆくやうな眩しさを感じたけれども我慢して、その眼にちつと力を入れて、睫毛まつげのおの／＼きに微かすかな羞はぢらひをあつめながら、男の顔を見詰めてゐると、道男は直ぐに眞つ赤になつて下を向いた。さうして、取られた手を引き込ませやうとして、春枝の華奢きゃしゃな白い手の先きの中で、自分の細い指をもがかせてゐた。

「泣きさうな顔をしてゐる。」

春枝は笑つてゐて、なか／＼その手をはなさなかつた。

然う云つた言葉の下から、ほんとうに、道男の眼から涙がにじんできた。

「ばかね。」

春枝は二三度男の手を振つてから、それをぐいと向ふの方へ持つて行つてぱんと放した。さうして、長襦袢の上に羽織を引つけて欄干のところへ出て見た。

春枝は悪い顔の色をしてゐた。さうして、眉毛ばかり濃いのが目に立つて臉や口尻に、荒んだ夜のなごりが、撓んで皺になつて醜い影を残してゐたけれども、眼だけは、一と晩ちう戀の思ひにやるせなく動いてゐたやうな情味のしたゝりを瞳の底に残してゐて、その色つばさがこつくりと潤つてゐた。春枝は小さな力のない欠伸をしてから、上唇だけで笑つたやうな、倦るい、抜けていきさうな表情を見せながらぼんやりと空の模様を眺めてゐた。

空のまんなかの一點が、ほつつりとほぐれて、其所がだん／＼赤味を帯びて明るくなつてきた。その明るさに追はれるやうに、時雨の数が軒のところに數へられるほど少なくなつてきて、ぱらりと小さな雨の足を掠らしてゐたけれども、それも、いつまでも見守つてゐるうちに、いつもなく途切れて立ち消えていった。さうして、ほんのりと目にもとまらないやうな日射しが、向ふの塀から見える松の枝に斜に色をこぼしてゐた。春枝はぢり／＼と雲の薄れてゆく空を眺めてゐると、なんとなく、自分の大事なものを秘めこんだ美しい世界が、それといつしよに、少しづつ端からめくられて行くやうな興ざめさを覺えて、氣になつた。

「降ればいゝのにね。」

春枝は吹きながら欄干から下を見た。此處の娘のお千満が、雑巾がけのあとの水を、バケツからぞんざいに撒いてゐる姿が、目の下に見える。起きてからまだ櫛も入れてないお千満の髪は、前髪

も、鬢<sup>びん</sup>も、たばも、銀杏返しの輪も、柔らかい素直な毛の靡<sup>なび</sup>き癖のまんまに、細長く、ずうと髪  
の形がだれてゐて、それで手を動かす度に、ゆら／＼と媚かしく揺れてゐる。お千満は好い加減に水  
を撒いてしまふと、そこいらの木戸口から、馴染みの誰れかの顔が出るかと思つて、しばらく然う  
して立つた儘<sup>あちこち</sup>彼方<sup>あちこち</sup>と見廻してゐたが、二階の欄干に春枝の立つてゐるのには氣が付かないで、  
その儘<sup>うち</sup>家内へ入つていつた。お向ふの煙草屋の店も、びつたりと硝子障子がしまつてゐて、店には  
いつもの娘の影も見えなかつた。隣<sup>となり</sup>家も斜向<sup>すぢむか</sup>ふの家も、門燈の艶消しがらすの白い球にしづかさ  
が潜<sup>ひそ</sup>み込んでゐた。その靜かさが家の構へを守つてゐるやうに、どこも呆氣なく森閑としてゐた。

春枝は、階下<sup>した</sup>へ下りやうとして、障子のところから、奥の座敷をのぞいて見た。

間の襖の一枚開いてるところから、夜着の赤い縞が見える。匆<sup>は</sup>ねかへしておいた夜着が舊<sup>もと</sup>の通り  
になつてゐるのは、道男がもう一度その中に入つたのかも知れないと思ひながら、春枝はそのまゝ聲  
もかけずに階子を下りていつた。

「お目覺めだよ。」

直ぐ下の座敷で、おたかの然ういふ聲がしたけれども、春枝は椽側傳<sup>はじかり</sup>ひに便所の方へ通り抜けて  
いつた。

「お嬢さん。お湯を取りませうか。」

春枝の出てくるのを、其所に佇んで待つてゐたお千満が、春枝と顔を見合はせると、直ぐに斯う  
云つて聲をかけた。

お千満は象牙のやうな艶々した生地をもつた色白で、いゝ加減眼を開いてゐても睫毛が長過ぎるので、眼の恰好がはつきりしないのである。鼻は低いけれども、眉毛が薄くて、可愛らしい口許をしてゐる。黒と鼠の荒い牛蒡縞の双子の着物に半襟をかけて、下から赤い襦袢の襟をすこし出してゐる。さうして知つてゐる人から貰ひあつめた緋鹿の子の古るくなつた手柄のきれを、ていねいにきはつて洗つて、それをはぎ合はせて、くけて、お千満は襪にしてゐる。黒縹子の半巾帯をちよつきりと結んだ端が、恰好よく兩方に垂れてゐるので、春枝はお千満のその姿が、可愛らしくて堪らなかつた。

「好きな服装。」

春枝は、さも好いたらしく微笑しながらお千満の顔を見た。

「さくばんは御厄介でしたことね。」

「いゝえ。何ういたしまして。」

お千満は頭を下げながら、どうしたのか顔を赤くした。それを紛らせるやうに友禪の前垂れで口許をかくしたけれども、見る見る額際まで赤くなつた。

「お湯を取りませうか。」

又、かう云つてお千満が聞くと、春枝がうなづいたので、お千満は急いで臺所の方へ引つ返していつた。

春枝は袖を重ね合はせて柱のところに寄つかゝつてゐた。小さい石地藏を据えた後に、木賊が青

青とのびてゐる。その青い色にちつと意識を凭れ込ませてゐると、昨夜からの心の疲れがだん／＼と遠のいてゆくやうな、煩ひのないはつきりした心持にかへつてゆく。戀も男も何所かへ消えてしまつて、たゞ自分だけがふうわりと心の底に残つてゐるやうな、靜な氣安さがよみがへつてきて春枝はしばらくの間、うつとりとしてゐた。

「お寒かございませんか。」

おたかが、椽側に座蒲團を持つてきて、春枝にあいさつをした。

おたかは、若い時、春枝の父の妾をしてゐたことがあつた。それから後に小さな葉茶屋に嫁付いて、その亭主が僅かの小金の貯へを残して死んでから、おたかは、その小金を貸し付けて、殖えた利足の財産で、今では樂に母娘二人が何も爲すに暮らしてゐる。お千滿は葉茶屋のあるじの先妻の娘であつた。

かうした因縁で、春枝の父が死亡つてからも、おたかは時々春枝の家に訪ねて行つたりして、縁をつないでゐた。かういふ女のところへ、自分のいたづらの爲につい宿を借りたりしたことが、春枝には今朝になつて見ると面伏せで、はつきりした言葉もその口からはちよいと出なかつたけれども、おたかは極りを悪るがらせずに、ちよこ／＼と世話を焼いて取り廻してゐた。

春枝は、ちつとも、おたかを眞實のある頼母しい女だとは思はなかつた。その顔も春枝は嫌ひだつた。

もう六十を越してゐるけれども、まだやつと五十そこ／＼にしきや見えなかつた。普通の男の背丈ならおたかの方が立ち越えるほど大きな女で、顔もいつたいに大きかつた。鼻がつんと高くつて、人を馬鹿にしたやうな顔をする時はきつとその大きな小鼻が動いて、鼻の穴がちつと擴がるのが癖だつた。としよりの唇にしては赤過ぎるほど、いゝ色を持つてゐた。その薄い赤い唇がいつも乾いてゐて、さうして、顰<sup>ぢ</sup>とへの字形に下唇を突き出して結んでゐた。皺はその顔一面だけれども、道具が揃つて大きいので、その立派な目鼻立ちまでが皺の中に埋まつてゐるやうには見えなかつた。

さうして皮膚がつや／＼と奇麗だつた。眼は大きくつて、この老婆の生涯がどれほど惡辣なものだつたかを思はせるやうに、鋭い光りを含んでゐるけれども、おたかは、大概是、その臉をわざとしほ／＼と萎<sup>し</sup>ませて、よく近眼の人がその眼をしぼめるやうに、ちろ／＼した眼付をして人に對するのがお極りだつた。それでも、何か自分の腑に落ちないことがあつたり、相手を邪推しやうとする時などは、その眼がぎろつと廻轉して、大きく光つた。

おたかの髪は、相當にまだきれいだつた。白髪染めで黒くしたその毛を、ちゃんと總髪<sup>そうがみ</sup>の丸髻<sup>まるけい</sup>にしてゐるのを、後からなど見ると、鬢<sup>はな</sup>たばの毛の彩などはいゝ頃の年増女<sup>としやうめ</sup>のやうにふつくりしてゐた。おたかは今朝も、その髪をきれいに撫で付けて、耳搔きのかんざしを一本後に挿してゐた。さうして、黒縮緬<sup>くしゅくべん</sup>の襦袢<sup>じゅはん</sup>の半襟と黒繻子<sup>くすし</sup>のきものゝ半襟とが隙もなしに揃つた襟を抜衣紋<sup>ぬきえもん</sup>にして、半手拭をその襟にきちんと當てゝゐた。

おたかは、春枝の身の落着きのいゝやうに、優しく柔らかに物を云つて、あんまり惡るでいねい

には纏繞<sup>まとは</sup>つてゆかないやうな、自然なとりなしをつくろつてゐた。昨夜<sup>ゆうべ</sup>、初めて春枝が此家<sup>こゝ</sup>を訪ねあてゝきた時に、おたかはもう聞かないうちから春枝のこゝろを知つてゐた。

「どうせ二階が明いてるんですから、ほんとに御遠慮なんぞはなさらないで、お氣やすくいらしつて下さいましよ、わたくしは斯うして打ち明けていたゞくと、どんなに嬉しいか知れませんか。」

おたかは斯う云つてよろこんだ。さうして霜夜の夜更けを、さんぐ歩き疲れた二人を二階に上げて、いろ／＼な心盡しで氣兼ねもさせずにあたゝめて呉れた。

春枝はそれに馴れやうとはしなかつたけれども、今の自分の氣儘さを、それなりに眼をふさいで受けてくれた、おたかの待遇<sup>もてなし</sup>で春枝は安心ができた。然うして、ついいゝ氣に甘えるやうな心持にもなつて、おたかの手の中にそつくりと、自分の優しい秘密を含んだ心の底を托<sup>たく</sup>けやうとしてゐた。――

お千満が縁側に花座<sup>ぐざ</sup>を敷いて、自分の鏡臺を持つて來て据ゑた。さうして自分の使ふお化粧道具などをそこに並べ立てた。

「何か召し上るものを見つゝろつておきませうね。」

おたかが然う云つて、お千満を招きながら奥へ行つた。

春枝はそのあとで、二階の人を思ひながら、髪を搔いたり、手水<sup>てうづ</sup>をつかつたりした。昨夜自分が無理に引きとめて、兩親の前へ歸りにくゝなつて心配してゐる若い男の心持を、何う慰めたらいい



ものかと思ふと、春枝はかうして落着いてはゐられなかつた。

寐床どいの中で、泣いてるかも知れない。あの厳しい親たちの目をかすめて、初めて家をあけたといふ心配が、どれほどあの初心なしほらしい胸を痛めてゐるのか知れないのだと思ふと、

「ばかね。」

と云ひつ放しにして、階下へ來てしまつたのが、可哀想でたまらなくなつた。それで湯にでも行つてくるやうに、お千満に言傳ことづてをして貰はうと思つて、春枝は濡れ手拭で顔を拭きながら障子を明けてお千満を呼んだ。

お千満が二階に行つてしまふと、春枝はおしろいを手にとりて、お粧つづりをした。けれども、それが今朝は億劫で、春枝はちつとも氣がのらなかつた。こんな事は何うでも、道男の心を、もう一度ゆふべ逢つた最初のやうに、自分に優しく可愛らしいものにしておいてこなければ、氣がすまなかつた。さつきから道男は自分に怒つてゐる。何か濟まない顔をして口もきかないのである。それは、昨夜の、あの時から――

春枝はいゝ加減にしておいて、まだ下りてこないお千満を何をしてゐるのかしらと疑ひながら、自分もそつと二階にあがつて行つた。お千満は唐紙この此方に困つた顔をして立つてゐた。

「どうして。」

「なんとも仰有らないもんですから。」

「ぢやあ、よござんすわ。」